

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第189号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成29年9月21日

ツメナガセキレイ



2016. 6. 18 サロベツ原野

撮影者 齋藤 佑朱 (江別市)



も く じ

サロベツのシマアオジと今後の保全活動について	長谷部 真	2
NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク	札幌市北区 樋口 孝城	3
探鳥会記録からみたシマアオジ	北海道レッドリスト (鳥類編) の改訂について	4
北海道環境生活部環境局生物多様性保全課	表紙の鳥 (ツメナガセキレイ)	6
江別市 齋藤 佑朱	ノハラツグミの観察記録	7
田中 史雄 (空知管内長沼町)・先崎 啓究 (岩見沢市)	外来種コリンウズラの道内初確認	8
(地独)北海道立総合研究機構 環境科学研究センター	玉田 克巳	8
千歳市 島崎 康広	カササギはどう千歳に進出したか	10
野鳥情報コーナー	野付半島におけるキョクアジサシの観察記録	12
道東コクガンネットワーク	藤井 薫	12
ムネアカタヒバリ観察記	札幌市手稲区 高橋 良直	12
シロハラクイナが札幌市内で繁殖	札幌市南区 菊地 一夫	13
探鳥会ほうこく	探鳥会あんない	16
鳥民だより		16

サロベツのシマアオジと今後の保全活動について

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部 真

今年(2017年)もサロベツにシマアオジは来ています。昨年と比較して、数が減少している感じはありません。雄だけでなく、なかなか観察することは難しいのですが、雌も確認しました。巣材運び・餌運びも確認しており、繁殖しています。巣立ち雛も見つけており、繁殖がうまくいっているようです。

サロベツ湿原センター(宗谷管内豊富町)にシマアオジが減少していることや観察マナーに関するパネルを展示しました。また、湿原センターの前にある木道のデッキにも同様に設置しました。その成果によるものなのか、今年は観察マナーが良くなってきています。

シマアオジはちょっと前までは普通種でしたが、急速な生息数の減少により、近々「種の保存法」に基づく希少種として指定される見込みです。指定されればシマアオジを保全するための法的根拠になります。今後はシマアオジの絶滅を避けるために、速やかに保護増殖事業が行われることが望まれます。

シマアオジ減少の主要な要因は国外にあるとされていますが、ここサロベツでも、現在繁殖に適している環境はごく限られた場所しかなく、環境の劣化などにより縮小しています。現在の生息地周辺を繁殖に更に好ましい環境に復元すれば、シマアオジの繁殖地の拡大が期待できます。

今後、シマアオジの生息数の増加に向けて、繁殖に適した未利用地をナショナルトラストのような方式で購入することも検討しなければならない課題と考えています。また、まだ知られていないシマアオジの繁殖地がサロベツに

残っているのか確認する必要があるため、生息調査を今後も継続していくことが重要と考えます。

現在シマアオジが確認されている繁殖地はサロベツだけですが、繁殖地はかつて北海道各地にありました。今後は北海道各地でシマアオジを観察してきた関係者と連絡を取りあい、明らかになっていない繁殖地や今後の繁殖地の復活に備えて情報を共有し、シマアオジの保全活動を連携して行えるようにしたいと考えています。

今年環境省の委託事業により、シマアオジの調査を行っています。その事業の一環として、秋以降に札幌でシンポジウムを開催し、調査結果も含めて報告する予定です。詳細が決まりましたら、ホームページなどで周知しますので、ぜひご確認ください。



シマアオジ(雄) 2017. 7. 4 サロベツ

探鳥会記録からみたシマアオジ

札幌市北区 樋口孝城

表1は本会の探鳥会でのシマアオジ記録の有無を示すものです。記録があるのは植苗（植苗ウトナイ）、福移、東米里だけです。シマアオジの生息環境・時期と探鳥会開催時期を併せ考えると、記録されるのは上記3探鳥地に限られることとなります。植苗と福移は1976年以前にも探鳥会が行われていたようですが、北海道野鳥だよりに探鳥会報告として記録が残されているのは1977年からです。東米里探鳥会は1984年が最初です。なお、1978年の植苗、1993年の福移の探鳥会は行われたのですが、野鳥だよりに記録は載せられていないため、シマアオジの記録の有無は不明です。

植苗は苫小牧市のウトナイ湖の北側で、勇払原野の一部になります。探鳥会は6月上旬に行われてきています。1978年の記録が野鳥だよりに残されていないのですが、その年以外は2002年まで毎年記録され続けてきました。記録がなくなったのは2003年で、以後は全くありません。

福移は札幌市北東部の端、石狩川左岸堤防河川敷とその周辺です。7月上旬に行われてきています。1977年から記録は断続的に続いていましたが、2001年が最後となっています。記録がある年とない年とが何年か続いては繰り返された傾向がありますが、それについては触れることは、ここではしません。

東米里は札幌市北東部の白石区にあり、もともとは泥炭層の低湿地帯で、原野状態にありました。探鳥会は毎年ほぼ6月中旬に行われていました。シマアオジは最初の年に記録されていますが、以後の記録年は少なく、1992年が最後です。なお、当地は年と共に開発が進んで原野環境が失われてしまったため、2014年以降は近隣の厚別川周辺に探鳥区域が移されています。

シマアオジと最も結びつきが強いのは植苗です。「植苗といえばシマアオジ」「シマアオジといえば植苗」という感じでした。野鳥だよりの探鳥会報告には参加者の感想文も載せられるのですが、たとえば2000年、第121号にある感想文には、「目的のシマアオジに逢えて、その鮮やかな黄色は今も忘れられません」と書かれています。シマアオジを見ることが目的で植苗探鳥会に参加するという人が多かったようです。

記録されなかった2003年の感想文は、当日の探鳥会担当幹事によるものですが、「…今年は見ることができず、担当幹事の力不足か、日頃の行いの悪さか…」となって

います。まさかこれが記録されなかった年の始まりとは予想もできなかったのでしょうか。

でも、その後全然記録されなくなってしまい、異変？が認識されてきたようです。2006年の感想文には、「今回の探鳥会では残念なことに（予想した通りではあったが）、昨年に引き続きシマアオジを見ることはできなかった」とあります。一応期待はするけれども、きつとだめだろうという感じになっています。

今になって言えることですが、福移の記録を見ると、以後全く記録されなくなった2002年より前にも3,4年の空白があることがありました。でも、その時に何らかの危機感をもった人はいなかったと思います。そういう時でも植苗では記録されており、また、探鳥会の日には見られなくても、別の日の個人的な探鳥では見られることがあったからだと思われます。

植苗と福移との比較において注意しなければならないことがあります。植苗探鳥会は6月上旬で、シマアオジ繁殖活動の前半戦で、雄のさえずりもおそらくピークに近い時期とみなされます。それに対して福移探鳥会は7月上旬で、さえずりがちょっと少なくなっている可能性があります。どちらの探鳥地でも、そこで実際に繁殖に関わっている雄は数少なく、多くても2羽とか3羽でしょう。声を聞いて姿を探すというシマアオジ発見スタイルを考慮するならば、たとえ同じ程度に生息していたとしても、福移の方が記録が少な目になることは十分に考えられます。

東米里での記録状況についてはどう考えたらいいでしょうか。福移の状況を考慮すると、探鳥会での記録年は少ないのですが、1990年代初めまではずっと生息していた可能性はあります。ただ、福移よりも早くいなくなってしまったことはほぼ確実です。東米里のみならず、広い地域で起こったシマアオジの減少と、東米里の原野環境消失が相まって、早々に姿を消してしまったのではないのでしょうか。

探鳥会記録には個体数情報は含まれず、記録の有無だけです。また、当該探鳥会はそれぞれ年に1回だけで、結果は当日の気象条件などに影響されます。長期間の記録の積み重ねとはいえ、必ずしも実際の姿を示すものではありませんが、少なくとも植苗探鳥会での結果はかなり劇的です。2003年には植苗のシマアオジはいなくなってしまったと考えるのが妥当と思われる。

表1. 北海道野鳥愛護会探鳥会におけるシマアオジの記録の有無 (1977~2006)

	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
植苗	○	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
福移	○	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	-	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×
東米里	・	・	・	・	・	・	・	○	×	×	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

北海道レッドリスト(鳥類編)の改訂について

北海道環境生活部環境局生物多様性保全課

1 これまでの経過

絶滅のおそれのある野生生物の種の現状については、1989(平成元)年に、(財)日本自然保護協会等から植物版のレッドデータブックが発行され、1991(平成3)年には、環境庁(現環境省)により動物版の「日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック」がとりまとめられ、その後、各分類群の追加や数次にわたる改訂が行われ、全国的な観点から希少な野生生物の保護対策が進められています。

一方、野生生物の生息・生育状況は地域によって異なるため、地域の実情に応じた資料として、北海道では、1994(平成6)年度に北海道版のレッドデータブックの作成作業に着手し、道内に生息、生育する野生生物のうち、植物、哺乳類、鳥類、両生類・爬虫類、魚類、昆虫の各分類群について、絶滅のおそれのある種等の選定を進め、2000(平成12)年3月に「北海道レッドリスト」として公表し、その後、2001(平成13)年に「北海道レッドデータブック2001」を発行しました。

2 北海道レッドリストの改訂について

その後、生息、生育状況に関するデータなどの新たな知見が蓄積されたこと、また、一部の種で種名に変更が生じるなど、希少な野生動植物を取り巻く状況が変化し、実態に合わない部分が生じてきたため、2014(平成26)年度からレッドリストの改訂検討に着手しました。

レッドリスト改訂検討を行うに当たっては、学識経験者等により希少野生動植物の保護方策の検討を行う「北海道希少野生動植物保護対策検討委員会」において、改訂検討の基本的な手順やカテゴリー区分、判定基準などを検討するとともに、各分類群の専門部会を設置し詳細な検討作業を行い、鳥類については次の専門部会構成員による検討のもと、2017(平成29)年4月に北海道レッドリスト(鳥類編)改訂版を公表しました。(表1参照)

鳥類専門部会構成員

氏名	所属
藤 卷 裕 蔵	帯広畜産大学名誉教授(座長)
玉 田 克 巳	(地独)北海道立総合研究機構 環境科学研究センター主査
川 路 則 友	森林総合研究所北海道支所 非常勤職員
綿 貫 豊	北海道大学大学院水産科学研究院教授

3 鳥類編の見直し結果について

今回の改訂の結果、本リストに掲載された種は、前回は72種でしたが、88種となり16種増加しました。

絶滅危惧に分類されるものについては、Cr(絶滅危惧IA類)が12種(シマアオジ等5種増加)、En(絶滅危惧IB類)が7種(増減なし)、Vu(絶滅危惧II類)が13種(ミサゴ等3種減)掲載され、全体で2種増加しました。

また、その他として、Nt(準絶滅危惧)が21種(ウミバト等18種減少)、N(留意)が8種(7種増加)、今回から設定したDd(情報不足)が24種、Lp(絶滅のおそれがある地域個体群)が1種掲載され、全体で14種増加しました。

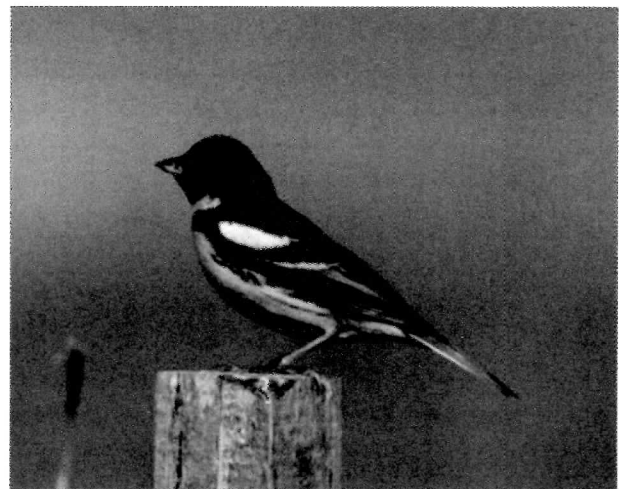
なお、上記カテゴリーについては、前回リスト作成時のものを基本として、環境省レッドリスト等を参照して名称を一部変更する等しています。(表2参照)

4 終わりに

北海道レッドリストは、道はもとより関係機関、団体等による希少な野生動植物種の保護の取り組みのための基礎資料として様々な場面で活用されています。

なお、リストに掲載された絶滅のおそれのある種を将来にわたって存続させていくためには、道民をはじめ多様な主体がその意味について真摯にとらえることが重要であり、道としては、こうした観点からの普及啓発や保護対策の検討など一層推進していく考えです。

また、今回のレッドリスト改訂にあたり、御協力をいただいた関係各位に対し、ここに改めて厚く御礼申し上げるとともに、本リストが事業者、関係団体などさまざまな主体による取り組みに広く活用されることを祈念します。



シマアオジ

(写真提供：(地独)北海道立総合研究機構 環境科学研究センター)

表1. 北海道レッドリスト (鳥類編) 改訂版 (2017年) 概要

絶滅 (Ex)

No.	和名	旧
1	カンムリツクシガモ	Ex
2	トキ	Ex

絶滅危惧 I A類 (Cr)

No.	和名	旧
1	オオミズナギドリ	Cr
2	チシマウガラス	Cr
3	ウミガラス	Cr
4	エトピリカ	Cr
5	ワシミミズク	Cr
6	シマフクロウ	Cr
7	ミユビゲラ	Cr
8	コウノトリ	En
9	カラフトアオアシシギ	Vu
10	ヘラシギ	Vu
11	キンメフクロウ	R
12	シマアオジ	R

絶滅危惧 I B類 (En)

No.	和名	旧
1	サンカノゴイ	En
2	クマタカ	En
3	コシャクシギ	Vu
4	チュウヒ	Vu
5	シマクイナ	R
6	アカモズ	R
7	ヒメウ	—

絶滅危惧 II類 (Vu)

No.	和名	旧
1	タンチョウ	En
2	オジロワシ	En
3	オオワシ	En
4	シジュウカラガン	Vu
5	アカアシシギ	Vu
6	ケイマフリ	Vu
7	ウミスズメ	Vu
8	クマゲラ	Vu
9	ハヤブサ	Vu
10	ホウロクシギ	R
11	アカショウビン	R
12	ツルシギ	—
13	タカブシギ	—

準絶滅危惧 (Nt)

No.	和名	旧
1	ミサゴ	Vu
2	ハイタカ	Vu
3	オオタカ	Vu
4	エゾライチョウ	R
5	ウズラ	R
6	オシドリ	R
7	ヨタカ	R
8	セイタカシギ	R
9	オオジシギ	R
10	ハチクマ	R
11	トラフズク	R
12	ツメナガセキレイ	R
13	ギンザンマシコ	R
14	カリガネ	—
15	シロチドリ	—
16	ハマシギ	—
17	ウミネコ	—
18	オオセグロカモメ	—
19	オオコノハズク	—
20	マキノセンニュウ	—
21	ホオアカ	—

情報不足 (Dd)

No.	和名	旧
1	イヌワシ	En
2	サカツラガン	Vu
3	オオヨシゴイ	R
4	ヒクイナ	R
5	チシマシギ	R
6	ツバメチドリ	R
7	マダラウミスズメ	R
8	シロフクロウ	R
9	コアカゲラ	R
10	シロハヤブサ	R
11	エゾオオアカゲラ	N
12	ツクシガモ	—
13	アカハジロ	—
14	ミゾゴイ	—
15	カラシラサギ	—
16	クロツラヘラサギ	—
17	マナヅル	—
18	イカルチドリ	—
19	シベリアオオハシシギ	—
20	オオソリハシシギ	—
21	ツミ	—
22	アオバズク	—
23	サンショウクイ	—
24	コジュリン	—

留意 (N)

No.	和名	旧
1	ヒシクイ	R
2	オオヒシクイ	R
3	マガン	R
4	ハクガン	R
5	コクガン	R
6	トモエガモ	R
7	エゾヤマセミ	R
8	ヤマシギ	—

絶滅のおそれのある地域個体群 (Lp)

No.	地域個体群名	旧
1	オオムシクイ道内繁殖個体群	—



表2. 北海道レッドリストのカテゴリー区分等

環境省 (2012)	北海道 (2001)	北海道 (改訂版)
<p>絶滅 (EX) すでに絶滅</p> <p>野生絶滅 (EW) 飼育・栽培下でのみ存続</p>	<p>絶滅種 (Ex) すでに絶滅</p> <p>野生絶滅種 (Ew) 飼育等の状態で生存</p>	<p>絶滅 (Ex) すでに絶滅</p> <p>野生絶滅 (Ew) 飼育等の状態で生存</p>
<p>絶滅危惧 I 類 (CR+EN)</p> <p>・絶滅危惧 I A 類 (CR) 近い将来絶滅の危険性が極めて高い</p> <p>・絶滅危惧 I B 類 (EN) I A 類ほどではないが、近い将来絶滅の危険性が高い</p>	<p>絶滅危機種 (Cr) 近い将来極めて高い確率で絶滅が懸念</p> <p>絶滅危惧種 (En) 現在の状態が引き続き作用すれば存続が困難</p>	<p>絶滅危惧 I 類</p> <p>・絶滅危惧 I A 類 (Cr) 近い将来絶滅の危険性が極めて高い</p> <p>・絶滅危惧 I B 類 (En) I A 類ほどではないが、近い将来絶滅の危険性が高い</p>
<p>絶滅危惧 II 類 (VU)</p> <p>現在の状態をもたらした要因が引き続き作用する場合、近い将来絶滅危惧 I 類のカテゴリーに移行</p>	<p>絶滅危急種 (Vu) 現在の状態が作用すれば、絶滅危惧種に移行</p>	<p>絶滅危惧 II 類 (Vu) 現在の状態をもたらした要因が引き続き作用する場合、近い将来絶滅危惧 I 類のカテゴリーに移行</p>
<p>準絶滅危惧 (NT)</p> <p>絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては上位カテゴリーに移行</p>	<p>希少種 (R) 存続基盤が脆弱</p>	<p>準絶滅危惧 (Nt) 絶滅危険度は小さいが、生息・生育条件の変化によっては上位カテゴリーに移行</p>
	<p>留意種 (N) 保護に留意 (個体群、生息・生育域とも安定しており特に絶滅のおそれはない)</p>	<p>留意 (N) 保護に留意 (個体群、生息・生育域とも安定しており特に絶滅のおそれはない)</p>
<p>情報不足 (DD) 評価するだけの情報が不足</p>		<p>情報不足 (Dd) 評価するだけの情報が不足</p>
<p>絶滅のおそれのある地域個体群 (Lp) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの</p>	<p>絶滅のおそれのある地域個体群 (Lp) 保護に留意すべき地域個体群</p>	<p>絶滅のおそれのある地域個体群 (Lp) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの</p>

表紙の鳥

ツメナガセキレイ

(カラー写真は<http://www.aigokai.org>に掲載)



黄色くて可愛らしいツメナガセキレイ、その名を聞いて誰もが「えっ!この鳥って爪が長い?」と思うでしょう。そう。その名のとおりこの鳥は他のセキレイ類と比べて、後ろのあしゆび(後趾)の爪が長いのです。このことが由来で「ツメナガセキレイ」という名前がついたそうです。私としては、なぜ爪が長いのが気になるところです。ちなみに英名は"yellow wagtail"。爪が長いことよりも体下面の黄色が名前の由来になっているようです。

6月半ばのサロベツ原野。昼間には子育てのために嘴に虫をくわえて運んでいたツメナガセキレイが、日没も近づく時間帯にもなると木の上に止まっていました。こちらに気づいているにも関わらず、相当リラックスしている様子で近づいても少しも動こうとしません。「私を撮ってください!」とばかりに写真のモデルにでもなってくれているかのようでした。片足を上げて羽の伸びをする様子も見せてくれました。

北海道札幌北高等学校1年 齋藤 佑朱(江別市)

ノハラツグミの観察記録

田中史雄(空知管内長沼町)・先崎啓究(岩見沢市)

本誌「北海道野鳥だより」176号と180号でノハラツグミの観察記録が多数掲載され、近年、北海道で記録が増えている傾向にあります。筆者らはその後もノハラツグミを観察することができたので報告します。

●2016年2月2日 岩見沢市中幌向

観察者：先崎啓究

道沿いのナナカマドで採食するツグミ10羽程の群れに混ざる1羽を発見しました。大雨覆の換羽差から第一回冬羽でした。この個体は14時過ぎから16時過ぎまで同所付近で観察できました。

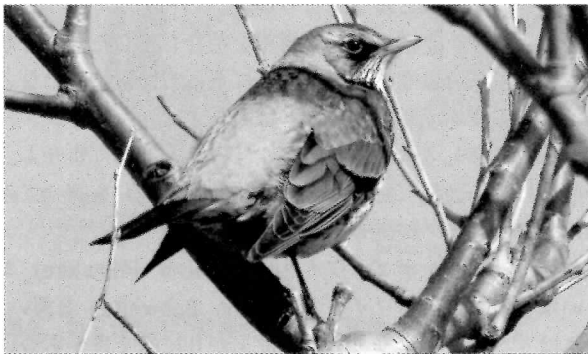


2016. 2. 2 岩見沢市 撮影者：先崎啓究

●2016年4月14日 稚内市抜海村浜勇知

観察者：先崎啓究・田中史雄

オオモズ観察中にオオモズを追い払うノハラツグミ1羽を発見しました。牧草地に降りてツグミの群れとともに採餌していました。河畔林に止まってぐぜる姿も度々観察されたことから雄の可能性が高そうです。発見当初はオオモズを追っていましたが、その後は逆に追われていました。黄色い嘴がとてもきれいで印象的な個体でした。同所に18日まで滞在しました。

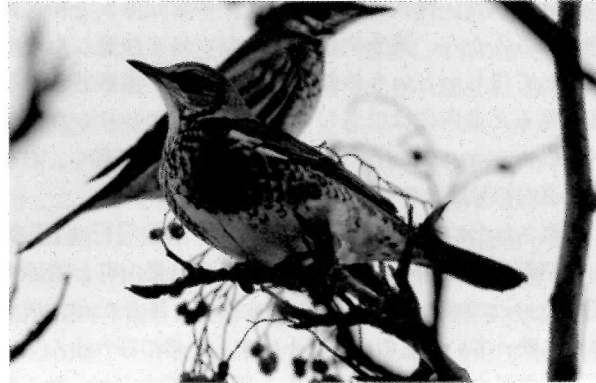


2016. 4. 14 稚内市 撮影者：田中史雄

●2017年2月4日 苫小牧市新開町

観察者：先崎理之

イオンモール前の国道36号線に点在する街路樹のナナカ



2017. 2. 4 苫小牧市 撮影者：先崎理之

マドにてツグミ400羽程の群れの中で1羽が観察されました。この個体も大雨覆の換羽差から第一回冬羽でした。翌日以降はナナカマドの減少が激しく、その日のみの確認となりました。

●2017年4月28日 留萌管内羽幌町築別炭砦

観察者：田中史雄

有名な廃墟アパート群の前の舗装道路で、ツグミ10羽ほどの群れと一緒に道路脇に降りているノハラツグミ1羽を発見しました。写真を数枚撮ったところで車が来てしまい、ツグミとともに飛び去って見失いました。その後は発見できず、翌日も観察できませんでした。



2017. 4. 28 留萌管内羽幌町 撮影者：田中史雄

前述した「北海道野鳥だより」の観察例にもあるように、道内で観察された本種はツグミの群れに混ざり、行動をとともにすることが多いようです。近年は特に1月下旬～2月上旬に街路樹（特にナナカマド）での発見や、春の渡り時期に道北で発見される例が多いようです。ツグミの群れを見たら丹念に1羽1羽チェックしてみると、ノハラツグミを見つけることができるかもしれません。日本では迷鳥とされるノハラツグミですが、道内で観察される近年の傾向を見ると、少なくとも北海道では数少ない冬鳥といった印象を受けます。

外来種コリンウズラの道内初確認

(地独) 北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

2016年秋に、株式会社エコテックの坂元直人さんと関将太郎さんから、調査中に見慣れない鳥を観察したので同定してほしいという依頼がありました。撮影された写真を見ると道内には生息していないはずのコリンウズラ (*Colinus virginianus*) である可能性が極めて高く、おそらく道内初記録なので報告します。

観察されたのは2016年9月27日です。観察場所は空知管内長沼町の夕張川の左岸堤防で、同管内栗山町と境界を接する付近です。写真は全部で6枚ありましたが、最も鮮明に映っているものが写真1です。一緒に写り込んでいるフキやアカツメクサの葉の大きさと比較すると、ウズラ (*Coturnix japonica*) と同等か少し大きいぐらいです。全身は茶色っぽい色をしています。背面は焦げ茶色、腹側は少し赤みがかった茶色で、頭部は体より黒っぽく見えます。嘴は太く短く、黒色です。これらの特徴は、北アメリカに生息するコリンウズラのオスの成鳥と一致します。



写真1. 長沼町の夕張川河川敷で目撃されたコリンウズラ
(関将太郎さん撮影)

コリンウズラの原産は北アメリカの中東部です。日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会 2012)には、Part Bの外来種・亜種のページにも記述がありません。しかし、インターネットで公開されている国立環境研究所の侵入生物データベースには、外来生物法の要注外来生物(法改正にともなって、現在は「生態系被害防止外来種」として紹介されています。国内では、群馬県や栃木県などの北関東から、京都府や大阪府などの近畿地方、そして愛媛県や高知県などの四国地方にも外来分布しているとされていま

す。猟犬の訓練用として1980年ごろから放鳥されるようになったと紹介されています。北米では温帯から亜熱帯に分布し、主な生息環境は草原や原野などで、深い森林には生息しないようです。

さて、昨年秋に観察されたコリンウズラですが、どのような経緯で侵入してきたのかはわかりません。近縁のウズラは渡りをしますが、ウズラやコリンウズラを含む、キジ目の鳥類は、ほとんどの種が渡りをしません。このことを考えると、侵入生物データベースで紹介されている最も近い外来分布域の北関東でも、北海道に飛来するには東北地方、さらに津軽海峡を飛び越えて来なくてはならず、本州の生息確認地域から飛んできた可能性は低いと思います。ペットなのか、猟犬の訓練用なのか、経緯はわかりませんが、人為的に放鳥された可能性が高いと思われます。

生息環境から考えると、今回観察されたのは河川堤防ですから、コリンウズラにとっては、本来の生息環境に近い環境であると思われます。北海道では、このような環境にはウズラが生息しているので、もし定着するとなると、何か悪い影響がでないか心配です。ただ、北米では温帯から亜熱帯に分布するという事なので、積雪が多く、冬の厳しい北海道に定着できる可能性は、あまり高くないと考えられます。坂元さんたちの情報によれば、2017年7月末現在まで、少なくとも月に5日程度は植生調査などのために、現地に赴いているとのことですが、新たな確認情報はないとのこと、今のところ定着にはいたっていないものと思われます。もともと北海道に生息している鳥ではないので、野外への放鳥は絶対にしないということと、今後、この鳥が定着するかどうか、注意深く監視していくことが大事だと思います。

コリンウズラとはどんな鳥なのか

さて、コリンウズラを目撃情報を紹介しましたが、そもそも日本の鳥ではなく、会員の方にとっては馴染みのない鳥だと思います(私も見たことはありません)。インターネットで検索しても、詳しい記述はほとんどありません。今回、外国の図鑑(Madge & McGowan 2002)を調べてみたので、参考までに紹介します。

英名はノーザンボブホワイト(Northern Bobwhite)あるいはコモンボブホワイト(Common Bobwhite)と言い、これは「ポップ・ホワイト」と尻上がりに鳴く声からついた名前のようなのです。

原産は北アメリカ大陸の中東部で、カナダ南東部(オンタリオ南部)からアメリカ東部、メキシコ東部、中部、南部などに分布し、メキシコ西部のソノラ州や西インド諸島

などにも隔離個体群が分布しています(図1)。北アメリカでは、もっともよく知られた狩猟鳥のようです。また移入種として世界各地に持ち込まれ、アメリカ北西部、フランス、ニュージーランドなどにも生息しています。

文献によれば原産地では、おもにオスの特徴により大きく北の1グループ(基亜種 *virginianus* を含むグループ)



図1. コリンウズラの分布

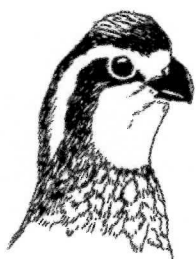
と南の3グループ(亜種 *ridgwayi*、亜種 *pectoralis* グループおよび亜種 *atriceps* グループ)に分けられています。北のグループは、頭部の白と黒の部分がはっきりしており、喉と眉が白もしくは黄褐色味を帯びた白で、黒っぽい過眼線があります。また、胸から脇腹にかけては赤褐色と白のまだら模様になっており、腹部の中心は白っぽい色をしています。それに対して、南の3グループでは、眉が白いものやまったくないもの、黒っぽい顔をしたものなど頭部のパターンにはいろいろあるようですが(図2)、腹面は一律に赤みがかった茶色を示します。

インターネットなどでコリンウズラを検索すると、画像として出てくるものは、北のグループのものが多く、ほとんどのものに過眼線があり、喉と眉は白っぽく、腹部がまだら模様をしているものが紹介されています。今回長沼町で観察されたコリンウズラは、亜種まで同定するのは困難ですが、黒っぽい顔と胸から腹にかけて赤褐色をしているので、南のグループに属する1亜種のようにみえます。

国内では2015年11月23日、茨城県常総市菅生沼で、コリンウズラが捕獲され、標識放鳥されています(山階鳥類研究所 2017)。これも顔は黒っぽいので、南のグループではないかと思われます。

参考文献

Madge S & McGowan P (2002) Pheasants, partridges & Grouse. Christopher Helm, London.
 山階鳥類研究所 (2017) 2015年度鳥類標識調査報告書.
 山階鳥類研究所, 我孫子



基亜種
Colinus virginianus virginianus
(北のグループ)



Colinus virginianus pectoralis
(pectoralisグループ)



Colinus virginianus ridgwayi
(南のグループ)



Colinus virginianus atriceps
(atricepsグループ)

図2. コリンウズラの基亜種と主な亜種

カササギはどう千歳に進出したか

千歳市 島崎 康 広

1980年代に室蘭市内で確認されたカササギは、胆振管内白老町や苫小牧市でも確認され、その後苫小牧市内で増えました。苫小牧市内には今、約200羽のカササギがいると推定されるそうです。このカササギが今後、どう苫小牧市外へと拡大していくのが注目されています。今年(2017年)、千歳市内では私が確認しているだけで4つがいが繁殖を始めましたので、最低でも8羽の成鳥がいると思います。4カ所で繁殖し8羽になるまで、どう千歳市内に進出したか、自分の記録をもとにまとめてみました。

千歳市の「新千歳市史 通史編上巻」中の「千歳市で確認された鳥類一覧」(1971年～2008年の記録)によると2003年～2008年(5年ごとに記入)にかけて長都沼周辺(千歳市中央)で迷鳥として確認されているようです。千歳市の記録では迷鳥となっていますが、周辺の恵庭市では、恵庭カワセミの会から提供していただいた資料によると2006年に下島松(恵庭市北部の地域)でも確認されています。2011年から目撃が増え、確認されている場所は島松の郊外と恵庭市役所から恵庭公園にかけてですが、恵庭市や千歳市に進出してきたのはこの頃からかもしれません。

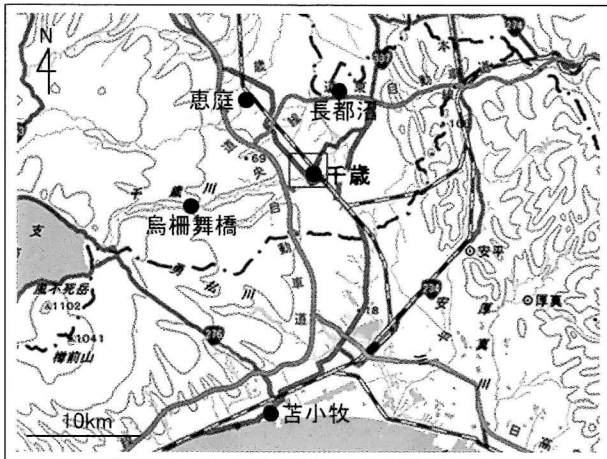


図1. 千歳市周辺地図

私が千歳市内で最初に確認したのは2013年で当会の千歳川探鳥会が始まる前(第一烏柵舞橋付近、千歳市蘭越)でしたし、この年から急に目撃が増えてきたのは住宅地に定住したからかもしれません。この年の11月、新富という住宅地で民家の屋根に2羽でいるカササギが近所の方によって見られていますし、私も同じ月に、桜木という住宅地で民家の玄関前にいる2羽のカササギを確認していて、どちらも2羽ですので、もしかするとこの年に

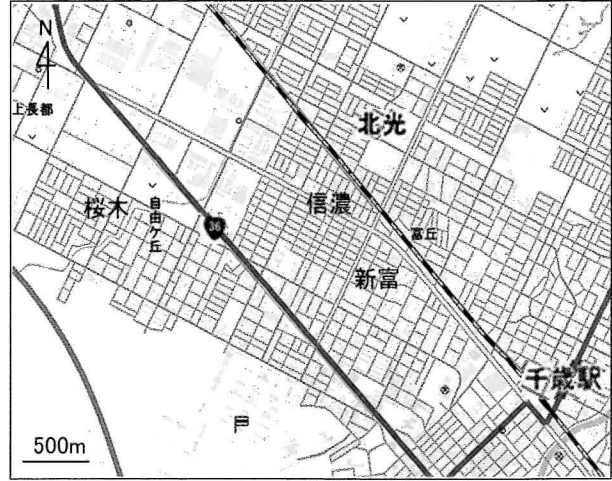


図2. 千歳市内の町名位置図

どこかで営巣が試みられていたのかもしれませんが。

2014年5月14日、仕事からの帰りに空き地で何度も猫を攻撃するカササギを目撃しました。残念ながら実際に攻撃しているところの写真を撮ることはできませんでしたが、写真1は執拗さに負けて引き上げる猫を追っていくカササギです。その後にカササギが向かった方向に信濃小学校の林「信濃の森」がありましたので、営巣の期待もあり探しましたが、この年は見つけることはできませんでした。



写真1. 猫を追うカササギ (2014. 5. 14)

2015年3月、木にまだ葉が生い茂る前から「信濃の森」を気にしていると予想通り、巣作りをするカササギが見られました。しかし、すぐの隣にハシボンガラスの巣があり、お互いに牽制しながらの巣作りに負けたのか、途中から見かけることがなくなりました。しかし、同じつ

がいかどうかは分かりませんが、これより北側の北信濃の鉄塔で営巣するつがいを確認されています。

2016年にはこの北信濃の鉄塔を含め、3カ所で巣作りが始まりましたが、新富の住宅地（前述した民家の近所）のものは高圧鉄塔だったため、完成間近で巣ごと撤去されてしまいました。するとすぐに隣の高圧鉄塔に作り始めたのですが、成功したかどうかは残念ながら確認出来ませんでした。また、もう1カ所、北光の高圧鉄塔に作られたものは使われたかどうかは確認出来ませんでした。巣は最後まで残っていました。昨年も使われた北信濃の鉄塔は、成功したように思われますが、ヒナを確認することは出来ませんでした。カササギの場合、見ていると巣材を運ぶ時も完成してからもいったん出かけると戻ってくるまでに15分~20分かかっているように思われますし、完成すると中にいるかどうかはなかなか分かりづらいのですが、この巣の場合、きちんと完成する前に使い始めたのか何かの関係で壊れたのか、中にいることを確認する機会が多く、観察には適していました。この年の9月3日、信濃の児童公園に少なくとも6羽のカササギがいました。しばらく見ているとそのうちの数羽は幼鳥のようです（写真2）。春に巣を作ったと思われる3カ所のちょうど真ん中付近になるので、どこの巣が成功したのかは分かりませんが、少なくとも無事に育ったところがあるようです。



写真2. 千歳市内での幼鳥初認 (2016. 9. 3)

佐賀県のカササギは、営巣に電柱を利用するものが大多数のようですが、千歳市のカササギも今年（2017年）巣作りを始めた4カ所のうち3カ所は高圧鉄塔です。高圧鉄塔の巣は撤去されてしまう可能性があり心配でしたが、他の1カ所は住宅地の街路樹に作っていました。今のところは市民の認識としてカササギはハシボソガラスやハシブトガラスと言った一般的にガラスと言われていた野鳥に比べて友好的に受け止められているようで、最初にこの場を教えてくださいました方の話では、近所の住民はガラスの巣かと撤去しようと思ったらしいのですが、カササギのことを説明すると納得して下さったとのこと

でした。

カササギが増えている苫小牧市は積雪が少ない地域でそれが定住を促進したと思われそうですが、積雪地でのカササギの越冬について「ペットフード失敬説」もあるようです。それだけで生き延びられるのか？と個人的には思いますが、屋外で飼っている犬の餌を失敬しているカササギは多いように思います。と言いますのも、住宅の屋根から庭と思われるところへ降りていくというシーンを多く見ているからです。それ以外に燃やせるゴミの日の早朝、ゴミステーションで見かけることも多く、人間社会と密接に関係しているようにも思います。この3月、今年営巣を始めたところへ行くと民家の庭にある犬小屋の前でお休み中の持ち主（犬）にお構いなしで犬小屋のぞき込むカササギがいました（写真3）。ドッグフードを失敬するところを撮ることが出来るか！とわくわくして見ていましたが、残念ながら通行人があったため、飛び立ってしまいました。

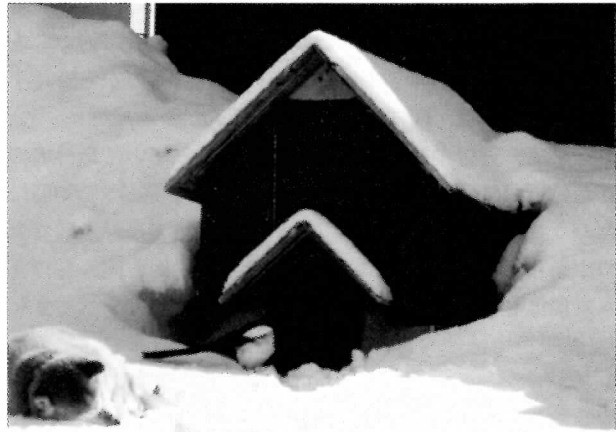
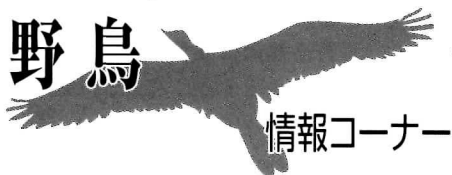


写真3. 犬小屋を伺うカササギ (2017. 3. 8)

千歳市でのカササギが見られる場所で不思議に思うことがあります。北海道のカササギの場合、過密状態になっている苫小牧市を含め、白老町や室蘭市、全てが海岸線で、苫小牧市から北上してきたと考えるなら、千歳市の南部地域でも見られても良いと思うのですが、目撃はすべて市内の北部地域です。私の生活環境にもよるのかもしれませんが、他の地域では見かけません。最近では面識のない方からカササギ情報をいただくこともあるのですが、今のところやはり北部のみです。ゴミステーション等の餌にしても樹木や高圧鉄塔等の営巣環境も北側に限ったことではありません。なぜ限られた地域を好んでいるのか、今のところきちんとした根拠はわかりません。

今年、心配したように鉄塔に作られたうちの1カ所は卵があったかどうかは分かりませんが、きれいに巣材は取り除かれてしまい、他の3カ所もヒナが誕生したかは確認できませんでしたが、幼鳥の目撃情報がありますので、今年も少なくとも1カ所では成功したようです。

野鳥



情報コーナー

野付半島における キョクアジサシの観察記録

道東コクガンネットワーク 藤井 薫

北海道では2例目（2004年9月オホーツク管内斜里町での記録がある）と思われるキョクアジサシを野付半島（根室管内標津町）で観察しましたので報告いたします。

2017年6月3日の野付半島の外海は接近する2つの低気圧の影響で強風と高波が強い日となりました。5月中にはシギ・チドリ類のほとんどが野付半島を通過し、渡りの時期も終盤を迎えておりましたが、この日の荒天に何かいる可能性があるかと判断し、尾岱沼側の春別川河口から野付半島先端に向けて、観察を続けていました。

そして、野付半島野鳥観察舎が設置されている竜神崎の灯台付近の汽水池（通称：淡水池）に嵐を避けて500羽ほどのウミネコが避難しておりました。野付半島野鳥観察舎の中から観察を続けていると、野付半島先端方向からウミネコに混じりアジサシ類が1羽飛来し、水浴びを始めました。双眼鏡で確認すると、足とクチバシが鮮赤で、アカアジサシかキョクアジサシのどちらかと判断しました。観察できた時間は3分ほどでしたが、その後、そのアジサシ



キョクアジサシ 2017. 6. 3 野付半島

類は北東方向の外海に向かって飛び去ってしまいました。

撮影したそのアジサシ類の画像を、過去に野付湾で撮影していたアカアジサシの画像と比較したところ、今回の個体は①クチバシが先端まで赤く短い、②初列風切の裏のパターンがキョクアジサシに類似する、③頭部の形が明らかに丸い、④尾羽の両側に飾羽の様な極端に長い羽があることの4点でキョクアジサシと確認しました。（その後、念のために多くの野鳥図鑑を手がけている、東京都在住の野鳥写真家の叶内拓哉氏にも確認して頂いています）

野付半島では2016年7月にもハシブトアジサシが出現していますので、今後も6月7月はアジサシ類の動きによく注意していきたいと考えています。

ムネアカタヒバリ観察記

札幌市手稲区 高橋 良直

北海道内では観察例が少ないと思われるムネアカタヒバリに出会いましたので報告します。

場所は石狩湾新港区域の西端にある人工的に作られた池です（小樽市銭函5丁目）。この池は春にはしばしばセイタカシギやキアシシギなどが入るので、時々様子を見に行っていました。2017年5月5日正午過ぎ、池にはスズガモ、キンクロハジロなどのカモ類が60羽ほど入っていました。視線を池の縁に移すと砂の上になにやら見かけない小鳥が1羽います。「顔の赤いセキレイ」といった感じの鳥なのですが、種名が思い当たりません。かなり距離があり、証拠写真が数コマなんとか撮れたのですが、すぐに見失ってしまい、再び姿を目にすることはありませんでした。

帰宅後パソコンで写真を見ると、頭から胸にかけて明るいレンガ色、背には太くて黒い縦斑があり、縦斑に沿って



ムネアカタヒバリ 2017. 5. 5 石狩湾新港（小樽市）

白い筋が目立っています。図鑑で調べると、これらの特徴はムネアカタヒバリの成鳥夏羽とズバリ一致します。私にとってはもちろん初観察で、足繁く通えばいいこともあるよと、この鳥に励まされたような次第です。

シロハラクイナが札幌市内で繁殖

札幌市南区 菊地 一夫

昨年の2016年7月18日、札幌市北区の百合が原公園でパンの親子を観察しているとき、クイナの親子と思われる鳥が目に入りました。急いでシャッターを押すも葦の中、もう見えません。その間4秒余りでした。撮った写真を図鑑で確かめるとシロハラクイナ親子のようです。北海道でも繁殖？当然、初見、初撮りですが足や腹などをハッキリと確認できていないので本当にシロハラクイナなのか、次の日、雨でしたが再び百合が原公園へ出かけました。現地に到着すると雨なので人はいません。親鳥はすぐ見つけることができ、確かにシロハラクイナでしたが、雛を見つけることはできませんでした。雛はこの公園内か近くの河川で生まれたものと推測しました。北海道にシロハラクイナが飛来していることは知っていましたので繁殖も当然と思っていました。

年が明けて2017年4月に野鳥観察をしていた北海道野鳥愛護会の方々とご一緒させていただく機会を得ました。シロハラクイナの親子のこと話すと、「北海道での繁殖は初記録です。宜しければ記録写真と撮影場所・日付を教えて



シロハラクイナの親子 2016. 7. 18 札幌市北区

欲しい」と言われました。今年も繁殖の可能性があるかもしれないので、しばらくは撮影場所を公表をしないということを条件に情報提供しました。その後、北海道野鳥愛護会広報部でシロハラクイナの雛で間違いがないかどうかを調べたところ、シロハラクイナに詳しい方から「間違いないでしょう」との回答を得たそうです。これまでに埼玉県で繁殖した記録はあるそうですが、北海道でもシロハラクイナが繁殖したというのは貴重な記録だと思います。今年2017年、同所でシロハラクイナは確認できませんでした。どうやら1年限りだったようです。



千歳川

2017. 5. 14

札幌市北区
中島 聖子

朝7:30、少し早めに集合場所へ到着すると、千歳川のせせらぎの中に、たくさんの野鳥のさえずりが聞こえてきました。アカゲラのドラミングが響いたと思ったら、「カワセミだ！」の声に、一斉に向こう岸を見つめる参加者の方たち。その中に私達家族3人も交えてもらい、探鳥会が始まる前から、さっそくスコープを覗きました。

春の千歳川は足元に山野草が咲き、頭のすぐ上ではイワツバメが、チュツ、チュツと鳴きながら飛び回っていました。まるで私達をお出迎えしてくれているようで、とても嬉しくなりました。歩くたびにさえずりが聞こえ、目の前を飛び回る鳥たちに、7才の娘もすっかり夢中になっていました。次々と姿を見せてくれる、いろいろな鳥たち。そして、幸せの青い鳥、オオルリにも出逢え、豊かな自然の中でゆっくりと過ごす貴重な時間となりました。

帰り道の途中、「アカショウビンを見てみたいなあ」と言う娘。「昔は、ここにもいたんだよ。鳥たちが暮らし続けていくには、ここ北海道だけではなく、世界中の自然が守られ続けたいいけないね。鳥たちは世界中を飛び回るから。」という言葉と一緒に歩いた方からいただきまし

た。その通りだと思いました。

また来年の千歳川探鳥会が、楽しみです。ありがとうございました。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ツバメ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、アオジ

以上40種



2017. 5. 14 千歳川探鳥会

参加者撮影

【参加者】阿部勝利、伊藤 牧・俊子、今堀魁人、今村浩史、岩井幸子、大表順子、小倉史恵、加藤睦子、栗林宏三、齋藤(由)、佐藤香織、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、鈴木勝之、高橋貞夫、田中冬彦、辻 雅司・方子、堂守敏和、中川 哲・信子、中島伸樹・聖子・蘭、畑正輔、早坂泰夫、美頭佳範、廣木朋子、本間康裕、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上37名

【担当幹事】栗林宏三、島崎康広

鵜 川 河 口

2017. 5. 21

【記録された鳥】カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、クロガモ、ウミアイサ、キジバト、アビ、ウミウ、アオサギ、カッコウ、コチドリ、オグロシギ、アカアシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、センダイムシクイ、コヨシキリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上28種

【参加者】浅野紗千子、阿部勝利、白田 正、遠藤明美、大表順子、小野寺まゆみ、門村徳男、金子喜映・洋子、川東保憲・知子、岸谷美恵子、北山政人、齋藤由美子・佑朱、佐藤啓子、品川睦生、謝 倩水、鈴木勝之、高橋貞夫、高橋宣子、張 淼、辻 雅司・方子、畑 正輔、早坂泰夫、本間康裕、柳 富美子、吉田鏡子、吉田慶子、涌井博文 以上31名

【担当幹事】門村徳男、本間康裕



アカアシシギ 2017. 5. 21 鵜川河口 (写真提供: 北山 政人さん)

野 幌 森 林 公 園

(早朝探鳥会)

2017. 5. 28

札幌市北区 田隈 泰信

定年退職を期に、この春から探鳥会に参加させて頂き、5月28日の早朝探鳥会でようやく3回目の初心者です。本会の樋口孝城会長には、家が近く、職場が同じというご縁で、JR通勤の車内と当別町にある大学の裏山で、たびたびご指導を頂きました。野鳥に興味をもったきっかけは、

30年ほど前、友人と道東の百名山を巡り、最後に登った羅臼岳での経験です。知床縦走を続ける友と別れ、ゴゼンタチバナの咲く山道を、巡礼者の気分で犀の角のようにひとり下山する途中、ふと考えました。霧雨の森でしきりに鳴きかわす野鳥の名前がわかり、その姿を思い描くことができたら、どんなに人生が豊かになるだろうと。数年後、偶然立ち寄った古本屋で、野鳥の声を解説するカセットテープ「日本の野鳥、森の四季」に出会いました。

探鳥会では毎回新鮮な収穫を楽しんでいます。初回のモエレ沼では、午後で開催されたデジタル・バードウォッチングの学習効果も手伝って、それまで皆同じように見えていたカモ類をいくつか区別できるようになりました。翌日、妻をモエレ沼に連れだし、あれがヒドリガモ(緋鳥鴨)、笑った顔がカルガモで、鼻の白いのがオオバン、白装束のミコアイサといった具合に、人に教える勉強法を実践しました。4月29日の森林公園では、他の会員より一瞬早く発見したクロツグミと、野草に詳しい会員から教えて頂いたヒメザゼンソウが印象に残りました。今回の早朝探鳥会では、夜来の冷雨がいつぶり返すかと心配されました



フクロウ 2017. 5. 28 野幌森林公園 (写真提供: 田隈 泰信さん)

が、猛禽類のフクロウを撮影できたこと、またユウシュランを観察できたことが収穫でした。ご多忙の中、初心者にもわかるよう毎回工夫を凝らされるデジタル・バードウォッチングの講師の皆さんに深く感謝します。参加する前の予想に反し、元気な中高年ばかりでなく、若い会員が積極的に活躍している姿に接し、大変心強く感じています。身勝手な私が探鳥会に期待することは、1. 探鳥技術の向上、2. 関連情報の収集、3. 同好の士との親睦、4. 鳥や草花に詳しい会員から直接学ぶことです。本を読むより、上級者から貴重な体験談を直接拝聴する方が楽しく、記憶に残るのは間違いありません。足腰の立つ間に、希少な猛禽類を観察できるようになりたいものと、密かに高望みしている次第です。

【記録された鳥】オシドリ、キジバト、アオバト、ツツドリ、トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エ

ナガ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キバシリ、クロツグミ、アカハラ、コルリ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、ニューナイスズメ、カワラヒワ、イカル、アオジ

以上33種

【参加者】秋山洋子、阿部 徹、阿部真美、池端耕治、今堀魁人、今村三枝子、白田 正、大表順子、北山政人、小西美美枝、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋きよ子、高橋利道、田隈泰信、田中冬彦、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、道場 優、畑 正輔、早坂慶子、早坂泰夫、福士一徳、松原寛直・敏子、山本正廣・育子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上33名

【担当幹事】島田芳郎 田中 陽

植 苗 ウ ト ナ イ

2017. 6. 4

苫小牧市 佐藤 伸善

今回、こちらの北海道野鳥愛護会様の探鳥会に初めて参加させていただきました。ウトナイ湖にはよく足を運んでいます。今回の植苗駅～美々川河口というのはまだ見たことがなかったのが今回の参加のきっかけです。集合場所の植苗駅に到着すると顔見知りの方が数名いらっしゃって一安心です。曇り空でしたが、雨が降ってきそうな気がしましたのでポンチョを着込んで準備良し。いざ出発。

植苗駅から国道36号線に至る道路は車で何度も通っていますが、ゆっくりと見たことがなかったので、新鮮でした。「ここってこんな風になっていたんだ」とか「こんな所に湿地があったんだ」等と思いながら歩いていると何種類かの野鳥の声が聞こえてきます。近くにいた方が「これは〇〇の声です」などと教えてくださいました。やがて道路を離れて林の中へ。

林に入って間もなく「メジロ、メジロ！」の声がして指さす方向を見上げるとメジロの姿を確認できました。林を抜けて草原地帯に入りどんどん進んでいくと、道の脇にズミの花でしょか。白い花が満開でした。ここではチュウヒの姿を確認できました。そうこうしながら美々川河口に到着しました。時々小雨がぱらつくなか、しばしの観察タイム。ここでは、マガモ、アマツバメ、アオサギ等の姿を確認できました。最後に鳥合わせ。今回は29種類の鳥達が確認できました。そして解散。

ちょっと残って観察をした後、私も帰ろうかと思ったとき、1羽のアマツバメが私から5mくらいの距離を保ちながら、まるで「さようなら」の挨拶でもしているかのように私の周りをぐるっと一回りしてくれました。ちょっと感激しました。

時々小雨が降る様な天気でしたが、結構楽しむことができて良かったです。また機会があれば参加させていただきます。どうも有難うございました。

【記録された鳥】マガモ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、アマツバメ、オオジシギ、トビ、チュウヒ、

アリスイ、コゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、ベニマシコ、イカル、アオジ

以上29種

【参加者】小西峰夫・美美枝、媚山陽子、佐藤伸善、島崎康広、谷川夏江、谷川充穂、田村裕子、辻 雅司・方子、畑 正輔、平岡信夫、藤岡千鶴江、本間康裕、本杉政司・朋子、山田博之、山木翠子、横山加奈子、鷺田善幸

以上20名

【担当幹事】辻 雅司 鷺田善幸

厚 別 川

2017. 6. 11

※ 雨天のため中止となりました。

野 幌 森 林 公 園

2017. 6. 18

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カイツブリ、キジバト、アオバト、アオサギ、ツツドリ、カッコウ、トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、アオジ

以上23種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、金子喜映、川東保憲・知子、栗林宏三、小西美美枝、笹森繁明、品川睦生、島崎康広、鈴木勝之、高井さつき、高田征男、高橋利道、田中さちよ、田辺 至、辻田捷紀、道場 優、戸津高保、中田愛、中村 隆、畑 正輔、樋口孝城、辺見敦子、松原寛直・敏子、道川富美子、山木翠子、山本育子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上32名

【担当幹事】道場 優、中村 隆

福 移

2017. 6. 25

石狩市 竹田 芳範

今日は朝から雨天でした。でも、去年参加したこの会では、34種の鳥を確認できたので、天候が上向けば、今年も多くの草原性の鳥を見られるだろうと期待しながら家を出ました。私は、草のてっぺんなどに止まることが多いので、見つけやすいという点で草原性の鳥が好きです。それに、美声の持ち主も多いと思っています。とはいっても、ほとんどの鳥が地味な羽色なので、見つけるのがなかなか難しいのも事実です。喉が鮮やかな赤色のあのノゴマ雄ですら、声はすれども姿は見え、「そこにいたのか」という日も多いです。

さて、今回も出会えたホオアカですが、ここ2・3年で

やっと囁りを覚えた鳥の一つです。鳴き声を覚えてしまうと、彼らが好きな環境なら結構いろいろな所にいることがわかってきたので、発寒川河畔のサイクリングロードを歩いていると、4～5個体を見つけることもザラです。しかし、被写体としてのホオアカは手強い。たいてい、20m以上の距離を取るからです。この鳥の事が大好きな友人に至近距離から撮った写真を送って喜ばせようと思っても、接近を許してくれません。一日中雨だった今日も良い写真は撮れませんでした。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、オオセグロカモメ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ウグイス、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン
以上22種

【参加者】 岩井 茂、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、品川陸生、竹田芳範、辻 雅司、畑 正輔、早坂泰夫、山本康裕、横山加奈子
以上11名

【担当幹事】 栗林宏三、辻 雅司



【宮島沼】

2017年10月1日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。マガンのほかにも、

ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時には猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。湖畔から沼を見るだけで移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：湖畔10：00

交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発（月形行）
または月形駅発（岩見沢行）
「大富農協前」下車 徒歩10分

【野幌森林公園】

2017年10月8日(日)、11月5日(日)、12月3日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。なお、12月3日からは冬コース（ショート）を歩きますので、午前中に解散します。

集 合：野幌森林公園大沢口 9：00

交 通：夕鉄バス 新札幌駅発（文京台南町行）
「大沢公園入口」下車 徒歩5分
JRバス 新札幌駅発（文京台循環線）
「文京台南町」下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2017年11月12日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木に止まっているかもしれません。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとることになります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 9：30

交 通：道南バス 新千歳空港発（苫小牧行）
「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆ 昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。

☆ 探鳥会の問い合わせ先

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465
10：00～16：00（土日、祝日を除く。）

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダーを販売します（1部1,200円）。お渡しは11月ウトナイ湖探鳥会と12月野幌森林公園探鳥会となりますので、申込時に受け取り場所をお知らせください。

申し込み先 畑 正輔 TEL 011-894-0017
携帯TEL 090-3117-4261
E-mail hata2002@lapis.plala.or.jp

【新しく会員になられた方々】

小宮山 誠（大阪府豊中市）
中村 萬千子（札幌市南区）
和歌月 里佳（苫小牧市）
田守 真一・敦子（札幌市中央区）

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>